

三筋町の通人

第一回

當らずと雖も遠からん者は音にも聞き近くば寄
つて目に三筋町東か西か水無瀬何某といふ好男
子あり尤も自稱なりと念入りの但し書がつく
棒又股袖揃みより金といふ得物を携へたれば向
ふに敵なき勢にまかせ世の中の女に己の心
に從はぬといふ者は母親と光明寺の住職ばか
りだお茶挽藝妓が詮方なしに木で刻んだ日朝さ
ませがまうよりは肌の温かい生た色道の祖師
まい己の寫眞を縁起棚へ飾らぬが第一の心得
造ひだ愛敬のお守りは是から出ますと萬世橋
の際へ開帳札を建て國益の親玉へ蕎麥を配ら
うかと思ふくらみだが夫も却つて賣出す氣だ
思はれてはと引退いて宇内の形勢を窺へば不
便や花柳社會は常闇の有様だ今にも氣が付た奴
があれば己の家の門の外へ集つて三味線太鼓の
調子に合せて東京中の藝妓妓残らずが踊りも
催して先生どうかと引出しに来るだらうが然し

僅かの不景氣に驚いてシャッキリを止める輩だ
から思ひ策の尊を勤める働きはなからう一番
世直し人助けに金庫を押ツ開いて世間億萬の俗
物共を驚かせてやらうか夫にしても目指す敵相
手にして馬を乗り出さうといふ張台のある女が
一人もないとは藝妓の相場も下落した話し
サ少しは己が手を組んでハテナ此納りは何した
ものだと首を横に片向けるといふ珍な妖怪が現
はれて呉れなくては可笑しからずだ盤根錯雜に
逢はざれば利器の用は知れずで近ごろの女のや
うに己の顔を見たばかりでゴロ／＼と首を投出
されては腕エ奴等だと思はずギツクリ睨みたく
なる嗚呼腕が見せたい腕が鳴る此腕を見て呉れ
る者がないと眞に怒みだど渡邊の綱が羅生
門の歸りに熱に罹つたやうな詭言を吐いて一人
脂下つて居る處へ先生御在宅か是非君の智慧を
借用しなくては跋の付かぬ一大事件が出来ると
いふ寸法だとは是も當世には間延びの連中日本人
同士でも通辯が付かなくては眞面目な用は辨じ
兼さらな聲にて跳り込みしは古代な洒落で聞な

れた恐れ入谷の鬼子母神の傍に住む石榴とい
ふ變り者なり

第二回

憎まれ口を達者に叩くを通人と心得呑味に氣
取るを色男と覺えたる粹教外の自稱粹士尊と
い寺は門からとて異に捻つた格子戸に古い木彫
りの雲形を嵌め込み二間の庭は松葉を敷き詰め
て縁日出の藍鏡を有難げに苞入りにしたる指へ
地袋つき床の間の飾り宜しく變物盡しと察す
べし石榴はボンと膝をはたいて其手で腰の煙草
入を抜きトキニといふをキツカケに音のする角
彫の筒より早いを自慢か脂止めの煙管を取出し
ソレ君も御承知のと云ひかけて手烘りの火鉢
を引寄せ例の隠れ家へネで切つて煙草を吸ひつ
け火鉢の縁をトンと叩いてドウモ君に見せたい
嬋妍窈窕たる者が顯はれやした實にお目に掛け
たいよと云つて羽織の紐を結び直す眞似をして
わざと跡を言はずに澄し切つて居るといふ總て
容體を寫すに餘ほど手数が入谷の石榴子衣裳
付なども書たけれど警視廳の品觸を恐て爰に
省く水南瀬もグツト落付き自慢是は石榴子の御
詞とも思はず我輩に見せたいとは定めて曲玉
古鏡の奇品ならんと存せしに凡俗を脱せぬ婦人

の醜美などを論らひ玉はんとは宮戸川の流で
耳が洗ひたい耳といへば大阪の十萬堂にあつた
來山のお山人形を東京の者が五圓で買つたと
いふ話をしに耳にしましたが彼の來山の人形も正
成の騾路の鈴の形で先ごろ身まかれた柳亭翁も
由緒の正しいお山人形しかも來山の例の折るこ
とも高根の花や見たばかりの短冊を添へて珍藏
されたし品川町の萬林にも古くから來山のお山
人形を傳來して居るといふが兎角名高い物とな
ると類品が殖えるは脱れがたい事と見えますと
知つたかぶりの高慢口此方もまけぬ空笑ひ大き
にサお説の通りだ然し小倉色紙も顔色紙とい
ふがあるからお山人形の類の多いはその管サも
ともと伏見街道で賣つた數物を來山が手に取つ
たばかりで名品となつたのだから其の愛玩す
る者の心々で皆な眞物とするが宜いものサ風來
山人の天狗の體の鑑定にも世間で天狗といふ
なら天狗で通せといつたは腹が大きい只惜むべ
きは本文も見ずに來山の文を保名の狂亂から
覺えた連中が同じやうに、喉を失はせるのだ此
等は彼の謝筆制が所許一棒に打殺すべき輩だ
ハ、ハ、ハ、ハ、と何處で聞いたか大きな風呂敷を
擴げるに水無瀬は尙層にかゝつて威しを云はん
と腹の中で工夫中下女が運び出す廣蓋に盃洗の

音チリン

第三回

詞多きものは品少なし肝腎の用は云はずに互
ひの天狗籠へ酌かはず酒も熱鐵となつて焔や立
ん膳に並べしは何々ぞ皆な普通の人間が口にす
れば嗚呼を催す異味にして一つに講釋付
きわざゞ錢を出して買ひながら是は伊勢の友
人から送つてよこしたの夫は北海道の知己から
到來のと貰ひ物にして世間の廣いを吹聴顔な
ればまた是を馳走になる男も腐つた豆腐を飲
み込み顔は奇品だ實に妙味だ前日或る方より
松藻を精製した海苔を得ましたがイヤ其の味ひ
の珍なること君に半ばを獻じたかつたが博物家
の君なれば何だ是がと陋めらるゝを恐れて差出
しませんでしたと油を掛ければ水無瀬はうなづ
き松藻の海苔は宜い物です我輩も一度向島の
古怪の宅で嘗めた事があつたがなか／＼變つ
た味ひで得がたい品サと御謙遜で御分配の無
つたはお怨み申す全體藻の類ひは皆な製すれば
食されます人智が未だ進まぬので斯様な有益な
ものも儘かに金魚の住ひにもあそばされて用ゆ
る所なしに棄るは歎かましい我輩かねて此事に
感ずる所あれば今まで世俗が食することを知ら

ぬものを味ひて世に示す心得サと神農の生れ
がはりのやうな高慢よく是まで中毒で死なな
つたが不思議なり石榴は膝を進めトキニ君の智
慧を拜借といふ肝腎の用は他ならず今演説した
彼の隠れ家の姫たる姫人に付ての一條サ實は
少し慾心の趣向だから君に斥けらるゝかも知れ
ないが事花柳界に關していづれ君が御支配内の
筋ゆゑザツト本讀に取掛れば先づ其姫たる婦
人がいるの事情あつて今度戀の港へ船卸
をしようといふ場合に至つたところが是が世間
通例の押出しでは面白からず何か目先の變つた
事をして通客の眠りを醒させようといつたばか
りで其軍用金は前借金ばかりでは逆も足りず
何か工夫がと僕に女將軍から御下問であつた
からオツト來り引受けた一ト勘考して見ようと
無暗と受込んで歸つたには仔細あり爰が一番見
かけた山の高鳥阿房な奴を出し抜いて攫み込
む儲け口卑劣なやうだが趣向の種サと煙管で話
しの調子を取り獨り承知で述べ立たり

第四回

愚にして金多きは不幸の第一といふ通り此の三
筋町の水無瀬といふ變物も無事に我家に居れ
ば商家の旦那様で世を送るべきを下手な俳諧

の古池に陥り世間は俗だと異に見破るも身に不自由の無いからの養澤骨重屋の古狸書畫屋の黒猫が旦那ほど私共が日が利けば疾に藏を建並べるのでございませうと嬉しがらせて後手物を背負せ是れは先づお宅へお預け申つもりでございませう先日納めた光琳の屏風は出ますまいか一割り付で私共を潤はして下さいエ何五割なら放す夫は殺生然し今は少し寝入り時ですから思ふ所へ行きませぬが彼は屹度踊りますよ扨と慾氣をませた油を掛けとぅ〜祭りあげてお山の大将一人天狗としてしまひ蔭にて舌をはく情盡し油斷のならぬ世の中なり石榴も亦一個の難物己れが錢を遣はずに茶屋料理屋を遊び歩かんと心掛くる氣樂人同氣相求めるのではなくて同慢相比べるの突合とは頼みなき世の酒宴かな儲此石榴が謀計といふは此ほど或る止事なき方の落し胤なるおまつといふ女が仔細あつて吉原へ身を沈めるについで同人の手道具衣類の中に日ぼしき品もあり且つ父の形見の白檀佛は稀有の製作なるうへ白毫に嵌めたる玉はたしかに金剛石なれば同人が金が入るといふを幸ひそれを欺して買ひ取つて一ト儲けせんと考へそれにまづ二百圓ばかり夫を形に取

しに根がオイソレ者で色氣と慾氣が充満たる水無瀬なればそれは近ごろ珍なら摩訶羅金より先にその婢娟たるものに引導を渡し跡で工夫はさままだ宜き我輩が腕にある夫だけの筋立を聞けば跡の狂言は面白く書き上げて見せるよ何にしろ其婦人の出所が奥床しい實に此掘出し物は君にしては大出来提灯眞赤いなだ宜しい利益は二つ割評定場の九太夫ではあるまいし否に割方に念を入れるではないか何も洒落たネお互ひに強ち儲けようといふばかりが主義でない大丈夫宜しい漕つけるまでの入費は我輩一手持ち宜しい諸事は覺えの腕にありサと無暗と一人で宜しがつて石榴に口を開かせず乘氣になつた猪氣がかり橋の杭にやあたりなん

第五回

藏と藏とのあひく〜衆樂書無用と樂書すれば溝板刺すべからずを見て木拾ひの入る昔しと違ひ今は裏々新道とも光りまばゆきランプ燈に徒ら者も跡を收め煙草の粉をまかずして大の糞を魂ざけ人の提灯を借らざるもよく泥濘へ陥らざる世は斯く開けて見つきは清潔なれど人の心の塵埃は依然に積りて汚なびれたる行ひに足を濡すもの少しとせず左れば怪しのけだもの新道出

入る怪物はコン〜として人の顔を眺めヒソヒソとして立ちて囁く中にも一番奥まりたる二階作り手斧目の板塀船板の歩み鉤の手に折廻して切戸あり待合に似て待合にもあらず藝妓屋らしくして藝妓屋に異なり此處に訪ひ來る人々も俗かと見れば僧に似たり士族かと思へば商人たり一申節を越申節とうなる道人煎茶を政岡が子と飲み込んだ茶人反身と滋味こきませず否味ぞ惡の出立なりける石榴を先に水無瀬は入り來り師匠家かとおとづればオヤ三筋町の旦那久しく絲をお斷なすつたネどせ宿坊が多くて入らツしやるから私共へ御選座はありませうと思ひましたに今日はどういふ風の吹きまはしてオヤ石榴さんも御一途頼もしいこと庭から直によう御座いますヨお常やお梅をと老翁の音も並ならず石榴は切戸を押しながら例も綺麗にお掃除が届きますネ夫も其管か主婦が綺麗事だからと世辭をそらさぬ高調子石榴さん聞えましたよ澤山惡口を仰り今敵をとりますからと姿も見えぬに問を合せ互ひに油をかけ合ひ臺詞水無瀬はツウと茶が合つて高足で踏荒しまし御免下さいと馬鹿懲勸肩手をあげて體を振りチンと極つて座敷通り何だ床は相替らず文鱗の蕪か久しいものだよ近日施主に付いて玉田

に小原女でも書せようと頼みもせぬに餘計なせい口から高野こんな事から食ひ付かれるとも知らず石榴も例の知つたかぶりウム玉田とは御懇意か共進會に銅印を得ただけ腕もいゝが第一人物が面白いたしか當時は成程々々新奇町に來て居ますかと外見を云ふうち主婦のお柳か後ろを振向いて下女に用事を云ひ付けながら誠に失禮今日は是非見て頂きたいものがあるのですからイ、エ御面倒なものでありません文句さへ間違がなければ一寸手を付けて見ようかと思からですハイ何時かお話し申した上方唄ですと云ひかけてオヤマまだ御挨拶も申ませんでサと改まつて禮儀を述るも親類附合と嬉しがらせる手術なり

第六回

挨拶紛々高慢飲々しばらく無益を云ひ合ふうち主婦お柳は後ろを振向きお常やお君さんに一寸お出でと云つておくれと云切らぬうち又此方を向き三筋町の旦那貴君に御日に掛る子があるのですヨ石榴さんは最お近付になりましたといふうちしづかに足音して内儀と外から初音をもらすにズスハヤと水無瀬は襟かき合せ咳拂ひさへ勿體ぶればサアお入なさいと主婦のお柳

が引明くる隔ての襖の霞幕あらはれ出る美人あり是を馬琴翁の筆に假りて云へば顔は彌生の櫻花の吉野山に驚れる如く眉は中秋の新月の赤石の浦に出るに似たり秋波阿にして愛敬溢れ運歩輕くして羅綺にも堪ざるべし何彼とむづかしく形容に手間の取れる尤物なれば水無瀬は相好を崩して涎の腮に傳はるを忘れ平生の高慢も何處へやら蒙て東ねし海鼠の如くグタ〜として他愛なく何を請合しやら諸事よし〜と引受けて其日は歸りしがつく〜物を案ずるに彼ほどの美人を只勤めに落すも惜しきものなり我先づ手に入れて所持の物をまき上んか昔し石山寺で觀音の開帳ありしとき或男が日參して深く祈誓の體なりしが御戸帳が餘り古びたれば私寄進致したし苦しからずば京の錦織に命じ早速請へ申さんと云ふに寺僧は大きに喜びて其信心を褒めたれば男は其後十日ほど総て目ばゆきまでの錦一卷を持參し古き御戸帳は御本尊と思つて日夜拜し奉りければ賜りたしとて古きを頂きて歸りしが是れ其男の謀略にて其の古き御戸帳は世にも稀なる名物製なれば新しき錦とかへて大きな儲けをしたりとか我も先づ彼の女に衣服帯など今めかしき流行のものを拵へてやり此間締て出た唐織の帯を手付す此方

第七回

へ取りだん〜説きつけて彼の白毫の金剛石も捲き上て石榴には少しの分前を握らすれば手に付て下働きは十分にするであらう是は近ごろ仕合せを吹き寄せるワイと慾と色との二鼠三筋町の我が宅にて一人笑ひの白癡喜び随分太い男なり

賣物にははなはだしい飾り言今度鞍替へのおいらんは長持五棹箆箭が十重ぬ馬の背で運んだの船に積んで廻したのと大業に觸れ込んでも其實は着替へも持たぬ有様何が面白くて不自出ならぬ身が此淵に沈むべき虚喝とは天から知れた事を慾に塞つた耳にとめて商法する氣で遊びに出るとは數の知れぬ白癡どもと今まで嘲つた水無瀬何某も口と腹とは大きな逆ハ華族の落し席がこれ〜だと昔しの小説に有れた手術にフワと乗つて其後は天鰐と彼の隠れ家へ泳ぎ出し海老で鯛を釣るつもりなりとは淺い御了簡と先は鼻唄で居るとも知らず先づ金にて欺さんといろ〜な品を贈りし末いよ〜勤めに出るに付ては父の形見の借しけれど是を賣りて五丁町へ花を降し誠に天女の天降る極楽浄土と云はせし御身よきにとあてやかなる詞に水無瀬

是有難きまで忝けなく是にて大願成就せりと
 佛像を引取つて金二百圓貸し渡し元より證書
 を取らばこそ只己が手より美人の手へ渡したま
 まで悦んで居たが其うちお君は何處へやり行き
 て何の傾りもなかつたところ此ごろ或る方より
 先日貸したる佛像を此者へ渡しして呉るとの使あ
 りしに不審はれず夫は何かの間違ならんと使を
 返して早速彼の隠れ家へ出向いてお君は如何し
 たと聞く之主婦のお柳はニコ／＼顔でマア三筋
 町の旦那お聞きなさいよ世には随分變りものも
 ある者です御存じの通り彼の娘は瓜實顔で十軒
 店仕入れときて居ますから私が案じて華族の
 落し胤と洒落に觸れ込んだのですよ左様すると
 夫を正眞と思つてか埼玉縣の酒屋だとかいふお
 日出度い人が是非權妻によこせと話しをつけて
 百圓の支度金を差したので羽を生して行きま
 したがネ旦那世の中は廣いものでござります
 と云はれて水無瀬は仰天し俄かに變る顔色を
 悟られまじと咳にまぎらし其奴餘ほど珍な話し
 だと云つたぎりの二の句は出ずバクリ／＼とし
 てゐると彼の娘が申戯に貴君へお貸し申した佛
 縁は下岡さんの預りもので先刻お使が取りにお
 出だから貴方の所へ上ましたといふにいよく
 仰天し借は石榴めもグルになり己を一杯地へ

はめたか念無念と腹は立てど怒つては尙恥の
 上塗りと思へばお柳に顔を見られるも恥かしく
 挨拶もそこ／＼立歸り佛像も戻して三百圓ほ
 どの穴恨めしくさすがの高慢も驕を止め戸を
 閉ぢて引籠つて居るといふが安達が原の黒塚な
 らずと東のこもれる處諸所にありゐるべし恨
 むべし嗚呼恐る可し慎む可し